# 柴田德次郎

## ―26歳の建学―

国士館創立者
生誕120年特集

大正初期　青年期の柴田德次郎

本学は昨年、創立者柴田德次郎の生誕120周年という記念すべき年を迎えた。柴田德次郎は、明治23年12月20日に福岡県に生まれる。弱冠14歳で上京し、苦学の末に早稲田大学専門部を卒業する。早稲田在学時より、同郷の頭山満、野田卯太郎、中野正剛ら各界要人の知遇を得て、大正6年に26歳で「活学を講ずるの道場」すなわち国士館を創立した。以後、国士館の法人化とともに、中学校、専門学校をはじめ教育の府を整え、多くの青少年に教育の門戸を開き、文武両道の精神を基本とする人材の育成に努める。戦災で校舎を失う苦難を乗り越え、国士館の再建をはかり、中学・高等学校・大学・大学院を一貫する学校法人国士館の基礎を築いた。昭和48年に83歳で逝去するまで、教育への真摯な姿勢を貫き、生涯をとおして教育にすべてを捧げたのである。柴田德次郎の志は、現在の国士館に脈々と受け継がれている。この生誕記念を機に、教育者柴田德次郎の足跡を辿る。

（以下『柴田德次郎伝』は『柴田伝』、『国士館大学新聞』は『新聞』と表記）

### 【大志】

「人間は何時何処へほうり出されても、一人だち出来る人間にならねばならない」

福岡県に生まれた柴田德次郎は、東京での勉学を決意し、兄波次郎を頼り14歳で単身上京する。新聞配達や牛乳配達で学費を稼ぎ苦学しながら、早稲田大学で学ぶ。この苦学の時代に、同郷の要人である頭山満や野田卯太郎の知遇を得て、大正2年に「青年大民団」を結成し、国士館の創立へ向かう。

「人間は何時何処へほうり出されても、一人だち出来る人間にならねばならない。」（『柴田伝』305頁）と、この苦学の経験は、柴田德次郎の志を強くしたのである。

### 【創立】

「先づ自ら修めつゝ同時に後進を指導する教育の場所…例せば、吉田松陰松下村塾の如きを興したい」

柴田德次郎と有志たちは青年教育を目的に、大正6年11月4日、国士館を創立した。大正8年には世田谷に校地を得て、大講堂などを建設するとともに、財団法人を設置し、経営基盤の確立を図った。また、国士館館長として東奔西走し、国士館への支援を求めた。

「先づ自ら修めつゝ同時に後進を指導する教育の場所、真に日本国民を養成すべき道場、例せば、吉田松陰松下村塾の如きを興したい。」（『国士館と教育』68頁）という理想に賛同する多くの支援者を得て、国士館維持委員会を発足し、国士館は教育の環境を整えていくのである。

大正15年　創立期を支えた名士たち（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰、後列最右に柴田德次郎）

### 【文武】

「国士館の学生は、真の「国士」にならねばならぬ。…技術の末にはしり、勝敗のみに血道をあげるような武道であってはならない」

創立以来、国士館は一貫して「文武両道」の学風を掲げた。これは創立の母体「青年大民団」が、「心身の修練」と「智德の精進」を掲げ、人格形成の目標としたことに由来がある。昭和4年に創設した専門学校では、国語と漢文の教科とともに、剣道・柔道・弓道などの武道教科を必修科目とした。

この武道教育は、単に体を鍛えるためではなく「やわら（柔術）とりや剣術つかいは掃くほどいる。しかし国士館の学生は、真の「国士」にならねばならぬ。…技術の末にはしり、勝敗のみに血道をあげるような武道であってはならない。」（『柴田伝』308頁）と、武道を人づくりのひとつの柱としたのである。

昭和17年頃　武道教育

### 【受難】

「焼けてしまったものは仕方がない。…必ずやり直して元通りあるいはそれ以上のものを作って見せるから諸君は安心して焼残りの建物で頑張ってくれ」

昭和20年、国士館は戦災でほとんどの校舎を失った。また、法人名を「至德学園」に変更を余儀なくされ、教育方針の一つであった武道教育が禁止となり、苦難の時代を迎える。

現在も大講堂に掲げる「雉救林火」＝写真＝は、雉が林の火事にくちばしで水を運び、火を消す姿に同情した神が、助けの手を差し伸べたという仏教書の逸話が元となっている。

「焼けてしまったものは仕方がない。しかし自分は三十年前の創立の時に戻った気持で、必ずやり直して元通りあるいはそれ以上のものを作って見せるから諸君は安心して焼残りの建物で頑張ってくれ。」（『柴田伝』337頁）と、柴田德次郎は苦難に立ち向かう強い意志と覚悟を書に表し、国士館の復興に向かうのである。

### 【再起】

「日本の将来のために人間をつくらなければならない。この国士館精神を持つ国民を作らなければならない」

昭和28年、校名を「国士館」に復した後、昭和28年に短期大学を、昭和33年には大学を創設した。この発展には、各界の名士が集った国士館大学維持員会による支援があった。会員のひとり政治家の松野鶴平は「日本の将来のために人間をつくらなければならない。この国士館精神を持つ国民を作らなければならない。この意味において大方の人がご援助くださったと思う。」（『新聞』第1号）と述べたように、教育に賛同する名士たちの支援で、国士館は発展を遂げることとなる。

昭和27年頃　再建期を支えた名士たち

### 【信念】

「国家が教育を施す目的は、人を作り、国を興すことにある」

国士館は、大学創設の後、次々に学部を開設し、昭和41年の法学部と文学部の設置によって、中学・高等学校・大学・大学院を一貫する総合大学の陣容を整えた。同時に、校舎整備と施設拡充をはかり、学生・生徒数も急増する。

「国家が教育を施す目的は、人を作り、国を興すことにある。」（『国士館と教育』60頁）という一貫した信念で、人格形成に重きを置き、週一回の「館長訓話」を担当するなど、柴田德次郎は学園の総長の立場となっても、ひとりの教育者であり続けた。

また、学生の卒業前には自ら一人ひとりに「卒業面接」を行い、社会での活躍を真に願った。

昭和40年　館長訓話

### 【遺訓】

「誠意・勤労・見識・気魄で大いに自らの信ずるところを存分にやるべし」

昭和45年
叙勲を受けた柴田德次郎

昭和48年1月26日、国士館と共に歩んだ柴田德次郎は83歳で逝去した。その功績を称え、昭和45年には勲二等瑞宝章が、逝去後に正四位に叙された。

「諸君は今日限りで学窓を巣立ち、明日からは待望の社会人として、その一歩を踏み出す。誠意・勤労・見識・気魄で大いに自らの信ずるところを存分にやるべし。…「任重くして道遠し」ことを忘れず、国士館で学び体得した無敵の力を発揮することを切望する。」（『新聞』第84号）との創立者の志は、社会に巣立った卒業生約15万人と全ての国士館関係者に、現在も脈々と受け継がれている。

## 創立者　柴田德次郎　略年譜

| 西暦 | 和暦 | 略年譜 | 国士館の沿革 |
|---|---|---|---|
| 1890 | 明治23 | 福岡県那珂郡別所村（現筑紫郡那珂川町別所）に誕生 | |
| 1905 | 38 | 実兄高木波次郎を頼り上京（14歳） | |
| 1912 | 大正元 | 早稲田大学専門部へ入学（21歳） | |
| 1913 | 2 | 青年大民団結成 | 麻布区笄町（現港区南青山）に青年大民団が発足 |
| 1915 | 4 | 早稲田大学専門部を卒業、中国・大連へ渡航（24歳） | |
| 1916 | 5 | 雑誌『大民』の主幹に就任、「此木田頑石」などの名で執筆（25歳） | 青年大民団、機関誌『大民』を創刊 |
| 1917 | 6 | 国士館館長に就任（26歳） | 麻布区笄町に、私塾「国士館」を創立 |
| 1919 | 8 | 財団法人国士館理事に就任（28歳） | 財団法人国士館を設立（設立者柴田德次郎・小村欣一）世田谷松陰神社隣接地（現世田谷キャンパス）に移転し、高等部を開設（学長長瀬鳳輔） |
| 1921 | 10 | ワシントン会議ほか欧米視察へ出発（大正11年帰国）（30歳） | 国士館維持委員会が発足（会長栗野慎一郎） |
| 1925 | 14 | | 国士館中学校を設置（校長長瀬鳳輔） |
| 1926 | 15 | 国士館中学校校長に就任（～昭和9年）（35歳） | 荏原郡西部6か町村合同経営の国士館商業学校を設置（校長大場信続） |
| 1929 | 昭和4 | | 国士館専門学校を設置（校長水野錬太郎） |
| 1930 | 5 | | 国士館高等拓植学校を設置（校長上塚司） |
| 1932 | 7 | 国士館高等拓植学校校長に就任（～昭和9年）（41歳） | |
| 1933 | 8 | | 満州鏡泊湖畔に鏡泊学園を設置（総務山田悌一） |
| 1938 | 13 | 日刊『大民新聞』創刊、社長に就任（主筆坂口二郎）（47歳） | |
| 1941 | 16 | 国士館専門学校校長に就任（～昭和20年）国士館商業学校校長に就任（～昭和19年）（50歳） | |
| 1942 | 17 | 国士館高等拓殖学校校長に就任（～昭和20年）（51歳） | 国士館高等拓殖学校を設置 |
| 1944 | 19 | 国士館工業学校校長に就任（～昭和21年）（53歳） | 戦時措置により、商業学校を国士館工業学校に転換設置 |
| 1945 | 20 | 公職追放を受ける（昭和27年解除）（54歳） | 戦災で校舎を焼失（大講堂ほかを除く） |
| 1946 | 21 | | 法人・校名を至德学園に改称 |
| 1947 | 22 | | 至德中学校（新制）を設置（校長鮎澤巌） |
| 1948 | 23 | | 至德高等学校（新制）、至德商業高等学校（新制）を設置（校長鮎澤巌） |
| 1951 | 26 | | 財団法人を学校法人至德学園に変更 |
| 1952 | 27 | | 国士館大学維持員会が発足（会長小坂順造） |
| 1953 | 28 | 至德専門学校校長に就任（～昭和30年）国士館短期大学学長に就任（～昭和48年）学校法人国士館理事長に就任（～昭和48年）（62歳） | 学校法人国士館に改称 国士館短期大学を創設 |
| 1958 | 33 | 国士館大学学長に就任（～昭和48年）（67歳） | 国士館大学を創設し、体育学部を設置 |
| 1959 | 34 | 国士館高等学校・中学校校長に就任（～昭和48年）（68歳） | |
| 1961 | 36 | | 国士館大学政経学部を設置 |
| 1963 | 38 | 学内会報にて、学園全体では「館長」、大学では「総長」の呼称と通達、総長に就任（～昭和48年）（72歳） | 国士館大学工学部（現理工学部）を設置 |
| 1965 | 40 | | 小野路校地（現多摩キャンパス）取得 国士館大学政経学部二部、大学院（政治学研究科・経済学研究科）を設置 |
| 1966 | 41 | | 国士館大学法学部、文学部を設置、鶴川校舎（現町田キャンパス）開設 |
| 1970 | 45 | 勲二等瑞宝章　叙勲（79歳） | |
| 1973 | 48 | 逝去（享年83歳）、正四位　叙位 | 柴田德次郎学園葬を挙行（葬儀委員長石井光次郎） |